

行動主義がくつがえしもの—おおい隠したもの

松本光太郎
(名古屋大学)

自己紹介

松本です。今日私は、この研究会を荒川さんと共同で主宰しているため主催者側であり、話題提供もさせていただくということでこの場に立っています。

このスライドの写真（からくり人形）は先ほどダウンロードしました。私の行動主義のイメージを表しています。からくり人形は、中部地区が有名です。とくに名古屋はからくり人形の延長上にある機械作りが得意で、人の行動の模倣や機械化をいろいろと行っています。これは『大人の科学』という雑誌として出された「茶運び坊主」の中身だそうです。

第4回てんむすフィールド研究会
「心理学の軌跡—行動主義とは別のあり方を考える」

「行動主義がくつがえしたもの—おおい隠したもの」



松本光太郎
(名古屋大学エコトピア科学研究所)

今日は、行動主義は心理学において、何をくつがえし、何をおおい隠したのかというテーマでお話をさせていただきます。私の話題提供は、先に話題を提供された渡邊先生・サトウ先生と重なるところと異なるところ両方あると思います。

私は、渡邊先生・サトウ先生ほど知られているわけではありませんので、はじめに自己紹介をしたいと思います。私は、環境心理学・発達心理学を専門としています。高齢者は取り囲む環境のなかでどのように生きているのか、そのようなテーマについて研究をしています。

具体的には、高齢者の生活における「外出することの意味」について検討したり、日常生活の記述から高齢者における「施設居住の価値」を検討したりしてきました。最近は、職場の事情でロボットの研究やヒューマンエラーの研究を行なっています。ロボットの研

究としては、現在介護ロボットの開発が広く進められているのですが、高齢者に提供することは望ましいのか検討しています。ヒューマンエラーの研究としては、エラーという出来事から人と環境の関係を再考することを行っています。また最近では、ロボットと対照的であり、重なるところもある人と植物の関係について研究を行なっています。テーマが拡がり過ぎてアイデンティティ・クライシスに陥っているのですが、人と環境の時間的な展開・変容に注目している点でいずれも環境心理学・発達心理学の範囲であると考えています。

自己紹介

- 環境心理学・発達心理学が専門・・・と思っている。
- 高齢者に注目している。
- 最近では「人とロボット」、「人と植物」といったテーマに取り組んでいる。
- 「同行・同伴」と呼ぶ人と一緒に歩く・いるアプローチをとることが多い。
- 行動主義に対してネガティブな印象を持っていたが、調べてみるといろいろと考えさせられた。

研究アプローチとして、主にフィールドワークを行っています。場所（フィールド）を限定するのではなく、一緒にずっと歩いていく「同行」という方法をとっています。一緒に歩くこと、もしくは一緒にいることを重ねることから、高齢者は取り囲む環境のなかをどのように生きているのか、というテーマについて研究を続けています。

フィールドワークという方法をとっているためか、行動主義に対して、率直に言ってネガティブな印象を持っていました。行動主義に対するアンチテーゼとして、自分自身の研究を位置づけているところがありました。けれども、今回荒川さんが行動主義というテーマで研究会をやりたいという希望をうけて、いろいろ調べてみると考えさせられ、面白いと思いました。行動主義はこの研究会でとりあげる価値のあるテーマだと思います。

ワトソンのミッション：何をくつがえしたのか

まず前半部では、先ほどの先生方と重なるところはあるのですが、「ワトソンのミッション：何をくつがえしたのか」というテーマで、ワトソン以降何がくつがえされたのか、確認していきたいと思います。

批判・否定

ワトソンはまず批判・否定をするんですね。何の批判・否定かというと、内観への批判、意識概念の否定です。それまで、セルフ・自分の意識を内観して報告するという方法がとられていました。内観は当人の報告に依存するため、他者の関与を許さない方法といえます。それに対してワトソンは、そもそも意識などないし、当人にしか分からない世界を扱

うことはいかななものかと疑問を呈したわけです。意識を内観して、「意識が・・・云々した」と語る枠組みをワトソンは否定しました。

その際取り上げられるのが、ウィリアム・ジェイムズの『心理学』における「意識の流れ」や、シグムンド・フロイトの「無意識」で、それらをワトソンは否定するわけです。私の理解ですが、簡単に言うと、何かが局在する見方、「それが云々する」という見方をワトソンは否定したのだと思います。

このワトソンの批判・否定について、私は納得するところがありました。意識や心といった局在的な本質というものを仮定して、「意識が・・・」「心が・・・」と語られることに問題を感じることは了解できます。心理学において「それは心が云々だよ」と語ることに危うさを感じることはあります。

ただそれでも、精神分析はおもしろい仮説だと考えています。精神分析における「無意識」がワトソンのいう局在的なものを仮定する点で問題をはらむのですが、一方であいまいでダイナミックなもの（欲動、夢など）を扱っている点でおもしろい仮説だと思います。

批判・否定

- 「内観」への批判・「意識」概念の否定。
- 意識を内観し、「意識が・・・」と語れることを否定。
- ジェイムズ「意識の流れ」、フロイト「無意識」を否定。
- 何かが局在するという仮説を批判した。

納得するところもある。
意識や心といった局在的な本質を仮定し、「意識・心が～」と語られることに問題を感じることは了解する。
・・・しかしそれでも、精神分析は興味深い仮説だと私は考えている。

方向性

ワトソンの方向性としては、著書『行動主義の心理学』のなかに、ズバリ「心理学を自然科学たらしめよう」と書かれています。感覚、知覚、心像、欲望、目標、思考、情動は主観的に定義されているため、これらは扱わないと言っています。

そのほかに、「行動主義者は物理学者が自然現象を支配し、操作するように、人間の行動を支配したい。人間の活動を予言し、支配することは、行動主義心理学の仕事である」と書かれています。

先ほどサトウ先生がワトソンはマニフェストが強いと言っていました。断言できる確証がないなかで、ワトソンはズバッと言うことが多いです。上述の「行動主義者は・・・」というくだりも極端な言い方だと思うのですが、実際そのように書かれていました。このくだりを読んで、物理学者は自然を支配・操作して、心理学者は人間の活動を予言・支配を目指していたのか、もしくは目指してい

方向性

- 『心理学を自然科学たらしめよう』
感覚、知覚、心像、欲望、目標、思考、情動は、主観的に定義されているため排除
- 『行動主義者は物理学者が自然現象を支配し、操作するように、人間の行動を支配したい。人間の活動を予言し、支配することは、行動主義心理学の仕事である』

（ワトソン 1930/1980 『行動主義の心理学』 河出書房新社）

物理学者は自然を支配・操作して、心理学者は人間の活動を予言・支配を目指していた／いるのか？それは可能と考えるのだろうか？

るのかと疑問に思いました。物理学者が自然を理解したいとか、自分の理解の下におきたいということは分かるのですが、支配・操作することが目的なのでしょうか。そして心理学者も予言・支配が目的なのでしょうか。さらにそれが可能だと考えているのでしょうか。皆さんにご意見を伺いたいところです。

方法

方法としてワトソンは、刺激（Stimulus）と反応（Response）というもののさしを使います。精神病について、「精神病は行動の病気・障害であり、分析には価値がなく、条件づけ（習慣形成）に価値をおく」と書かれていました。特に書かれていませんでしたが、精神病とはおそらく神経症のことを指しているのだと思います。具体的に、恐れ反応の除去についてワトソンは書いています。

先ほど、サトウ先生がワトソン以降の人が行動主義を作っていたという話をされていました。実際にワトソンの実験は稚拙といえるものです。恐れ反応の除去はワトソンの実験のなかで代表的なものとされています。その実験はですね、3歳のピーターという男の子はうさが苦手だと。

（アルバートでは？）

アルバートはですね、恐れ反応を作る実験です。ピーターは恐れ反応の除去の被験者です。ピーターという男の子はうさが苦手でした。そこで、彼がうさぎと接するときに、クラッカーと牛乳をおやつとして提供するんです。うさぎと直接関与しないけれども、おやつ（無条件刺激）によってうさぎへの恐怖が無くなるという1事例、それだけで行動主義はS-Rというもののさしで恐れ反応を除去できるとワトソンは結論づけます。事例の数はともかく、こういうもののさしをマニフェストとしてワトソンは提出します。

ワトソンはもともと動物心理学からはじめて、動物の行動を理解するところから、人の心理学へ移行しました。この移行の際には、ためらいがあったというか、ワトソン自身これをやっていいのかと思ったそうですが、思いきって飛び込んだそうです。ワトソンは動物の行動を理解するものさしであったS-Rを人の心理にも適用した、ということです。

ここで、ワトソンは人と動物を連続線上に考えているのかと私は疑問に思いました。S-Rというもののさしを動物の行動から人間の心理へ移行できると考えたわけですから、人と動物を連続線上に考えていたのでしょう。この「人と動物を連続線上に考えていたのか」

方法

■ 刺激(S)－反応(R)というものさし

精神病(神経症)は行動の病気・障害であり、分析には価値がなく、条件づけ(習慣形成)に価値をおく。e.g. 恐れ反応の除去

■ 動物の心理(行動)から人間の心理への移行

S-Rという図式を適用。

人と動物を連続線上に考えていたのだろうか？進化の系統樹に則り、動物の延長・連続線上に人がいると考えている人は少なくないだろう。

という私の疑問自体に、多くの方は「何を言っているの？」と思うのかもしれませんが。進化の系統樹に則って、動物の延長線上に人がいると考えている方はおそらく少なくないのだろうと思います。そしてワトソンもそう考えていたのではないかと思います。

人と動物は連続線上として考えるべきなのか・・・今は問いだけ出しておいて、後で私の考えは述べたいと思います。

当時の評価

当時の評価ですが、ワトソンの著書に付されている解説によると、「行動主義と精神分析は現代の西欧世界を二分しているに近い。しかしこの二つのうちで行動主義はアメリカ人の気質にぴったりである。そのわけは、それが希望にあふれ、民主的だからだ」という書評があったそうです。行動主義は精神分析と対比すると、アメリカ人の気質に合っていたと評されています。ワトソン自身、精神分析やゲシュタルト心理学を批判しています。

精神分析はオーストリア・ウィーンで、ゲシュタルト心理学はドイツ・ベルリンで生まれました。そして、両者とも指導的人物がユダヤ人でした。そのため、2次大戦により、フロイトはイギリスへ、ゲシュタルト心理学者たちはアメリカへ渡ります。後ほどウェルナーという発達心理学者を紹介しますが、彼もユダヤ人であったため、2次大戦により、ドイツから出て行かざるをえなくなりアメリカに渡ります。

精神分析やゲシュタルト心理学のようなドイツ・オーストリア的な思想を批判したうえで、行動主義はアメリカで生まれ評価されたわけですが、お国柄や文化的な背景、そして時代性など関連していたことが考えられます。この点について私は不勉強ですので、ご教示いただければ有り難いです。

(以下の文献が当時の状況に詳しい。フレミング, D. & ベイリン, B. (編)、亡命の現代史 4 知識人の大移動 2 社会学者・心理学者、荒川幾男・山口節郎・近藤邦夫・今 防人 (訳)、1968/1973、みすず書房； 生松敬三、人間への問いと現代：ナチズム前夜の思想史、1980、NHK ブックス)

ワトソンに続く行動主義

ワトソンの続く行動主義は、先ほどお2人の先生から紹介されていました。新行動主義の

当時の評価

- 『行動主義と精神分析は現代の西欧世界を二分しているに近い。しかしこの二つのうちで行動主義はアメリカ人の気質にぴったりである。そのわけは、それが希望にあふれ、民主的だからだ』という書評があった。

(ワトソン 1930/1980 『行動主義の心理学』 河出書房新社)

ドイツ的な思想 (e.g. 精神分析、ゲシュタルト心理学) をワトソンは批判していた。お国柄があるのだろう。

トールマンにおける認知地図、人には内的に地図があるとか、学習とか。それから、S-O-RとしてS-RにOrganization（有機体）を足します。

そして、行動分析学ですね。スキナーは反射（レスポネント）ではなく、自発的な（オペラント）行動を、刺激（S）により操作することを目指したということです。

そのように行動主義は続いていきます。

ワトソンに続く行動主義について、S-O-Rの図式は、基本的に意識概念と同じであると考えられます。というのは、スライドを見て欲しいのですが、反応、つまり行動が出現した後に、有機体に習慣が形成されたと理解します。この行動が起こらなければ、有機体については何もいえないわけです。行動から有機体について逆推するといいますか、行動から有機体について推定するというのが実際には行われているため、意識があるということと、習慣が形成されたということは理屈としては変わらないのです。

スライドの図の縦にひいた緑の線は、環境と人が切れているということを表しています。繰

り返しますが、行動が出現しなければ、有機体のこと、習慣が形成されたことは言えないのです。にもかかわらず、習慣が行動を生起させたとか、有機体が行動を出現させたと論理を逆転させているように思えるのです。

脳科学も同じ過ちを犯していると思います。私が荒川さんに怒りを感じているときに、私の脳だけを見たところで怒りを感じていることは分らないですよね。手が震えているとか、実際に殴るとか、そういった行動と、脳の変化の両方を把握することで、怒りと脳に関連があると理解するわけです。それに対して、脳科学者は理屈を逆転させて、「脳が怒りを起こした」と言います。しかし行動が起こらなければ、脳が関連していることは言えないはずで。そういった点で、図式的には脳科学はS-O-Rと同じだと考えています。

現代心理学への影響

現代心理学への影響です。何をくつがえしたのかという点です。行動主義の現代心理学への影響は大きいと思っています。他者を観察して、刺激－反応形式に基づいた法則を立てて、そして条件づけにより行動の習慣を形成する。最近流行っている認知行動療法などは、まさにこれだと思います。現代心理学に、行動主義の考え方はよく浸透しているというのが私の印象です。

ワトソンに続く行動主義

■ 新行動主義（トールマン）

- ・認知地図、学習
- ・S-O-R

■ 行動分析学（スキナー）

- ・SとRの関数関係
- ・スキナーボックスを代表として、反射（レスポネント）ではなく、自発的な（オペラント）行動を、刺激（S）により操作することを目指した。



S-O-Rの図式は、意識概念と同じ。行動が出現した後、「有機体の習慣形成／意識が行動を起こした」と論理を逆転させている点で、脳科学も同じ。

行動主義が浸透した理由というのは、何か調べたわけではないのですが、学知の公共化・市民化とか、つまり内観のように一部の人が占有するのではなくて、誰でも出来る・誰にでもアクセスできる点にあったのではないかと。学知の公共化・市民化の現れの一つではないかと思うところです。

それから、先ほど S-R と Organization を切った図を見せましたが、自然を対象化したように、人間も対象化するという時代性の影響もあるだろうと思っています。これは後ほど触れたいと思います。

先ほど、サトウ先生が「サブジェクト (Subject)」は主体なので、それは被験者だけでなく観察者も含まれると話していました。人を対象者・対象としてとらえることは行動主義の特徴であり、今の時代性を反映した見方でもあるのかなと思います。

行動主義は何をおおい隠したのか

これまで、ワトソン以降の心理学において、くつがえされてきたことについて確認してきました。つぎに、行動主義が何をおおい隠したのかという話です。

主観的世界

まず1つ目は、「主観的世界」です。主観というものをおおい隠したのだと思います。主観という言葉が心理学で使うと嫌がられます。すでに拒否反応で、耳に入らない人もいらっしゃるかもしれません。

浜田寿美男先生という奈良女子大学で発達心理学を教える一方で、裁判の供述分析をしている先生がおられます。浜田先生は「本源的自己中心性」ということをいっています(浜田寿美男、「私」とは何か ことばと身体の出会い、1999、講談社選書メチエ)。これは、戸田山先生がおられる哲学が得意の議論かもしれません。浜田先生の議論は私にとっては分かりやすいので今回紹介させていただきます。

現代心理学への影響

- 他者を観察することによって、刺激-反応形式に基づいた法則を立て、そして条件づけにより行動の習慣を形成する。
・ワトソンのミッションは現代の心理学によく浸透しているように思える。
- 浸透した理由は？
・学知の公共化・市民化の現れだろうか？
・自然を対象化したように、人間も対象化する時代性の影響だろうか？

主観的世界

- 「本源的自己中心性」(浜田, 1999)は否定できない。
私は他者の視点に、第3者の視点に完全に立つことはできない。この身体を通してしか世界を体験できない。
- 当人が主観的世界を引き受けて生きるしかない。条件づけで解決することとは異なる。

例. 息子のおむつ おむつがとれるよう促す親。うまくいくと褒められるけれども、おもらしすると失望される。上手になるとハードルが上がってしまう。自分にとっていいことなのか。

浜田先生がいうには、私は・・・皆さんそれぞれ私ですけども、私は他者の視点、もしくは第三者の視点には完全に立つことはできません。想像することはできます。彼、こういうふうに見えているんじゃないかとか、こう感じているんじゃないかとか、そういうことを想像することはできますが、彼の視点に完全に立つことはできない。そしてその想像さえも、この身体を通してしか想像できない、またこの身体を通してしか世界は体験できない・・・ということを浜田先生はいうわけです。主観的世界は誰かと交換することはできませんし、好むと好まざるとこの主観的世界を引き受けて生きていくしかないんです。

条件づけで解決することとは、問題にしていることの次元が異なっているように思います。心理学は経験的な学問ですので、具体的な例で考えてみたいと思います。

「息子のおむつ」についての話です。これは現在進行しているうちの息子にまつわる話です。うちの息子は3歳半なのですが、今おむつをとる真っ最中にあります。息子は3歳半でもうすぐ幼稚園ですので、親としてはおむつをとりたいわけです。私と連れ合いは、おむつがとれるように促します。息子はうまくいくと褒められる一方でおもらしをすると私たちから失望されます。「あ～～っ、今日うまくいったのに・・・ここを頑張れば一日おもらししなかったのに」と私たちは失望するわけです。

息子を見ていると気の毒だなと思うところがあります。おしっこが上手になるとハードルが上がってしまうんです。初めはトイレで1回おしっこしただけで褒められていたのに、今は1日中トイレに行ってちゃんとおしっこできないと親は失望するのですから。何かができるようになっていくことは息子にとって本当にいいことなのか、彼の視点から見てどうなのだろうかと思います。ひょっとしたら、ありえないのかもしれませんが、ずっとおむつの方がいいのかもしれない。・・・う～ん、それはないのかもしれませんが（苦笑）。

（一生たれ流しが一番いいんです。おむつもせずに、本当はね。）

ありがとうございます（笑）。そういったように、条件づけていくこと、つまり何かをできるようにしていくことと、当人にとっていいことであるのかということは別次元のことだと思うのです。そういったことから、条件づけで解決することと、当人の主観的世界とは違うことを言っているのではないかと思います。

他者や環境の意味

2点目は、サトウ先生の話と重なります。「他者や環境の意味」です。行動主義においては、他者や環境が刺激という所与の、すでに与えられた対象として・・・たとえばパソコンはパソコンとして、ペンがペンとしてすでに与えられた対象でしかなくなってしまう。他者や環境は対象である一方で、すでに・つねに取り巻いている存在でもあると思います。

このことを明らかにしたのは、生物学者のユクスキュルだと思います。「環世界論」はご存知でしょうか？「環世界」というのは Um-belt というドイツ語の邦訳ですが、「周りの世界」という意味だそうです。Environment というのは、スタティックな(静的な)環境ですが、Um-belt というのは自分を取り巻いている環境ということを表しています。

例として、ユクスキュルの本を翻訳した日

高敏隆先生が書かれていた陶器のネコの話を書きたいと思います(日高敏隆、動物と人間の世界認識、2007、ちくま学芸文庫)。日高先生のお宅に陶器のネコがあったそうなのですが、それを生き物のネコが見て、フ〜ッと唸ったり、おどしたり、引っかいたりしていたらしいのです。生き物のネコにとって、陶器のネコが生き物のネコではないと分からないわけです。人間は、生き物のネコと陶器のネコを間違ったりしませんよね。そのときにありがちな理解が、ネコは知覚や認知判断に劣っていて、人間はその点が優れているというものです。ユクスキュルによると、そうではなくて、ネコにはネコの、ダニにはダニの固有の知覚世界があって、それは人間の固有の知覚世界とは別物であって、それぞれ固有の知覚世界として成立しています。環境や他者はどの生物でも知覚できる客観的対象ではなくて、私たちは周りを取り巻いている他者や環境とそれぞれ固有の世界を形成しているといえます。その固有の環世界のなかで、私たちは様々なことを体験するわけです。

先ほど紹介した私の一緒に歩く「同行」という調査は、高齢者はどういう他者や環境に取り囲まれた世界を生活しているのか、ということを理解する研究といえます。

また「息子のおむつ」を例にして考えてみたいと思います。息子のおむつを外すために、今トイレでおしっこができれば、甘栗1個がもらえる S-R 方式を採用しています。さらに、うんこができれば、チョコとキャラメルがもらえるんです。どんな時間であっても、おしっことうんこができれば食べられるんです。ただ、報酬を与えるだけではうまくいきません。

スライドには「トイレに行く際の親の支援」と書いています。私と連れ合いは、定期的に「トイレに行きたくない？」と息子に探りを入れます。その際、声色もやさしく言います。それから、トイレに行く際は快く電気を点けます。息子は高い位置にある電気のスイッチに手が届きません。そこで息子がトイレに行く際に、私たちは快く電気を点けます。あと期待をかけます。期待をかけられなければ応えませんので、期待はかけます。一方で、

他者や環境の意味

- 他者や環境が刺激という所与の「対象」でしなくなってしまう。
 - 他者や環境は対象である一方で、すでに・つねに取り巻いている存在でもある
- 「環世界」(ユクスキュル, 1970)、「同行」(松本, 2005)

例. 息子のおむつ トイレでおしっこができれば、甘栗1個がもらえる S-R 方式を採用。しかしそれだけでうまくはいかない。
トイレに行く際の親の支援(定期的に探りを入れる、トイレに行く際は快く電気を点ける)。期待、期待をかけ過ぎないようにする配慮、ダメでも仕方がないと逃げ道を作る、トイレをにぎやかにするなど、ある行為が実現する際、他者や環境は対象とはいえない側面を有する。
また、身体的成長により環境を利用出来るようになる。

期待をかけ過ぎないように配慮もします。「ダメでも仕方がない」と、私たちにも息子にも逃げ道を作ります。そのほか、トイレをにぎやかに飾り立てています。トイレは寒々しいですから、少しでも行きたくなるように、にぎやかにしています。

まとめると、息子がトイレでおしっこ・うんこができるまでの過程で、親は自分たちの働きかけや対応、それから環境の設えを試行錯誤しながら形づくっていきます。息子にとって他者である親やトイレという環境を所与の対象として定位し、対象からの刺激によっておしっこ・うんこができるようになったというのは行動主義の枠組による理解です。ここでは、息子がおしっこ・うんこをトイレでできるようになる過程は、他者としての親と環境の設えは息子と固有の環世界を形成していると考えます。すなわち、他者と環境は、所与の対象ではなく、環世界の一部として形成するものと捉えます。

時間的展開(発達)

つぎに、行動主義がおおい隠してきたものとして、「時間的展開」もしくは「発達」が挙げられます。

「デジタル的アプローチ—アナログ的アプローチ」とスライドに書いています。もしくは「Empirical アプローチ—Experiencing アプローチ」と書いています。デジタル的アプローチが行動主義的だと私は考えています。もしくは、渡邊先生の話題提供にあった方法論的行動主義だと考えています。デジタル的アプローチでは、発達は連続しているとみなします。ある時点(t_A)とある時点(t_B)の比較ができること、つまり離散した時点間の比較が出来ることを含意していること、それをデジタル的アプローチと呼んでいます。

具体的にいうと、縦断的研究はデジタル的アプローチに当てはまります。スライドの図を見てください。高齢者の知能の発達曲線で、知的能力と年齢の相関として、このような図をよく見ます。この知的能力と年齢の相関図を描く際、こういった連続的な線を引きます。35歳と55歳は比較できて、いずれかが知能が高いと比較を行います。このような理解は行動主義を踏襲していると私は考えています。

それでは私はどういうアプローチをとるのかといいますと、アナログ的アプローチと名づけている方です。これはウェルナーの発達論を踏襲しています。ウェルナーは1920年代

時間的展開(発達)

■ デジタル的—アナログ的アプローチ (or Empirical—Experiencingアプローチ)

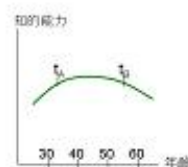
デジタル的アプローチ

- ・発達は連続している、とみる。
- ・ある時点(t_A)とある時点(t_B)の比較ができること、つまり離散した時点間の比較が出来ることを含意している。(e.g. 縦断的研究)

アナログ的アプローチ

- ・ウェルナー(1963)の有機-発達論的アプローチにおける「マイクログエネシス」。
- ・それは微視的な発生の連なりを時間的展開(発達)としてみることを提案する。
- ・発達は、人を取り囲む文脈・環境が形成する全体の変遷(メタモルフォーゼ)であり、それぞれ固有の全体を成しているため、非連続的である、とみる。
- ・時点の前後で比較せず、アナログ(連続)的に付き合い続ける同伴者の経験(主観的世界)を通して変遷を把握する。

e.g. 息子のおむつ「おむつをしているとき」から「おむつがとれたとき」へ



にハンブルグ大学にいましたが、同僚には哲学者であるカッシーラや先ほど紹介したユクスキュルがいたそうです。ウェルナーはカッシーラと同様、シンボルの問題を扱っています。シンボルが、もしくは言葉がどう発生してくるかという問題を扱っています。ウェルナーは有機-発達論的アプローチを提唱しています。有機とは、全体と言い換えてもいいと思います。有機-発達論的アプローチとは、人を個体として捉えるのではなく、ユクスキュルの環世界論と同様、取り巻いている環境を含めた全体として捉え、またその全体の時間的な変容を発達として捉えるアプローチです。

先ほどから話している「息子のおむつ」にまつわる話を例に考えてみます。息子は以前届かなかったトイレのスイッチを、最近ではトイレに座る際使う台を移動して、その台に乗って点けるようになりました。台を利用する知恵がつくことや身長が伸びることなど、当人の成長によって利用できなかった環境が利用できるようになると、環境の意味が変わってきます。当人の成長によって環境の意味が変わってくるわけですから、環境の意味は刺激といったすでに与えられた意味として確定するものではなく、徐々に変化していくものとしてとらえることが求められます。すなわち、発達とは当人を取り巻いている環境を含めた全体の変容のことを指すと考えます。

ウェルナーは全体の時間的な変容をとらえる手立てとして、「マイクロジェネシス」という見方を提案しています。日本語では、「微視発生」といいます。系統発生、個体発生、さらに微視発生となりますが、時々刻々全体は変容していきます。たとえば、私がお茶を飲んだとすると、お茶を飲む前と後では私は変わってしまっているわけです。もしくは、この研究会に参加されている皆さんは、研究会に参加される事前と事後では変わっている。そういった微視的な発生の連なりを時間的展開、つまり発達としてみることをウェルナーは提案するわけです。

発達は、人と取り囲む文脈・環境が形成する全体の変態、いわゆるメタモルフォーゼとしてそれぞれ固有の全体を成しているため、非連続的過程として考えます。通常時点間で比較ができると考えるのですが、研究会に参加する前と後では比較しようがない、別物であるというように理解します。そのため発達は非連続的であると考えられるわけです。

私の同行という方法は、時点の前後で比較をせずに、アナログ（連続）的に付き合い続けるなかで、当人にとって非連続的变化を、自分（研究者）の経験・主観的世界を通して非連続的に把握します。そういったアプローチをアナログ的アプローチと呼んでいます。

先ほどワトソンに言及するなかで、人と動物は連続線上にあるという見方について疑問を呈しました。アナログ的アプローチに則るならば、人と動物はそれぞれ固有の全体を形成し続けるわけですから、非連続的であると理解することが出来るというのが私の考えで

す。

この 2 つのアプローチの説明として、言葉が足りないかもしれませんが、一旦ここで止めます。分からないところが多いと思いますので、後でご質問をよろしくお願いします。

全体を問う視点

ここからはありがちな話です。行動主義的アプローチが広まってくると、全体を問う指向が弱くなることを危惧します。最近、私はロボットの研究を少ししていると、話題提供の冒頭で話しました。全体を問うことは、ロボット研究における「フレーム問題」にかかわってくるのではないかと思います。S-R 形式に基づいたエビデンスを積み上げていけば、人は本当に操作できるようになるのだろうか。ある刺激を与えて、反応が起こる。その枠組みで、その人のすべての行動を統制できるのだろうか。人と同様のロボットを作る際に制御することが求められるわけですが、それは実際に可能であるのか。フレーム問題においては、現在のところ、それは可能ではない・できないと結論づけていると思います。にもかかわらず、依然 S-R 形式で実験を重ねています。それが私には、ちょっとよく分からないところがあります。

刺激は多岐に渡りますし、刺激自体が時間とともに展開・変態しているために、予言することは難しいのではないかと思います。限られた環境であれば可能なかもしれませんが、それにしても、それは限られた話です。

つぎは、リスクの低減についてです。リスクの低減は必要ですし、できるだけ制御したいという気持ちは分かります。一方で、予測・制御できないことはあるという姿勢が必要ではないかと思います。

自然のなかで生きていくことは、とても過酷なことだと思います。自然はやさしいなんてことはなくて、自然に叩き込まれたら過酷です。だから人は都市（人工的な空間）を作ったのだと想像します。自然は脅威であるため、自然のリスクを低減したいのは分かる。ただリスク低減の限界と自然との付き合い方、両方を考えるべきではないかと考えます。

私は今、ロボットやヒューマンエラーの研究をしているため、どうリスクをマネジメントするか、どう統制するかという答えが求められます。ただ、そうすればそうするほど自然をおおい隠すことにつながってはいないだろうかと思います。

全体を問う視点

■ フレーム問題

- ・S-R形式に関するエビデンスを積み上げていけばいいのだろうか。
- ・刺激は多岐に渡るとともに、刺激全体が時間とともに展開(変態)しているため、予言することはできないのではないか。

■ 「リスクの低減」は必要だけれども、「予測・制御できないこと」はあるという姿勢が必要ではないか。

自然のなかで生きていくのは過酷であるため、人は都市(人工的な空間)を作ったのだと想像する。自然は脅威であるため、自然のリスクを低減したいのは分かる。しかしリスク低減の限界と、自然との付き合い方を考えるべきではないだろうか。リスクマネジメントは、自然をおおい隠すことにつながってはいないだろうか。

行動主義的な見方、つまり S - R 形式で環境を対象化し、その環境を制御することによって、リスクを低減しようとする方向性は限界があります。しかし現在の心理学は行動主義的な見方を当然のこととしてとってしまい、その限界があるという全体を問う視点を失い、どう制御するのかという局面だけを問うようになっているように思えます。

話題提供のまとめは、右のスライドに記しています。

私の話題提供は以上です。

まとめ

- ワトソンを中心に行動主義が何を批判・否定し、何をくつがえそうとしたのか紹介した。
- 行動主義の枠組みは、現代心理学において浸透しているという見解を示した。
- 行動主義が浸透していることで現在おおい隠されていることとして、「主観的世界」「他者や環境の意味」「時間的展開(発達)」「全体を問う視点」を挙げた。

